西南学院大学
図書館報

第23号
昭和38年12月5日発行
発行所　福岡市西新町798 電(82)0031
西南学院大学図書館
発行人　山下和夫

卒業生寄稿文

学生生活の思い出

63期生　占部三郎

陽春のもとで、卒業式を待ちながら静かに学生々活を振り返ってみると、3つの大きな思い出があります。

第1は、図書館の思い出、第2は、チャペルの思い出、第3は、諸先生方との話し合いです。私は一般の学生より年をとり、社会経験も味わって西南の地を踏みました関係上、記憶力も衰え、その上に経済学も分らないまま3年に学士入学をしましたので、マルクスもケインズも分らず、ストレートの学生に負けない為には、図書館における専門書の乱読以外に方法はありませんでした。そしてそれを助けてくれたのが図書館の開架制度でした。自分の読みたい本、好きな本がぎっしり並んでいるのを見た時の感激は今でも忘れることは出来ません。以来2年間、若い学生に混っての図書館での勉強生活は、本当に楽しいものでした。ある時はマルクスの労働価値論で苦しみつつ、館外の冬空を眺めたり、又ある時はケインズの乗数理論をめぐって休憩室で友人と議論したり、LPについて忘れかけた数学の本を繙いたり、卒業論文構成に頭を痛めたり、数えると限りない位の思い出があります。しかしなんといっても、それを助けてくれたのは図書館のあり方であると思います。

開架制度は、自分の勉強したい本を直接に自分の手で引き出せることで、時間の足りない自分には何よりもよい勉強刺戟剤であったと思います。ただ願わくば、もう少し経済政策、社会政策、経済学史に関する本が欲しく思いました。しかし以前自分が学んだ東京の大学は、開架制度でなく、本の利用について十分ではなかったと思います。その点西南の図書館は、自分の勉強にとっては大きな助けであり、思い出も大きいと思います。又学生の数も少なく、好きな本が容易に入手出来るのも魅力があります。私達学生にとっては、勉強が第1ですので、好きな本が手に入ること程うれしいことはありません。今静かに学窓について考えてみると、如何に図書館が重要であるかということに気付きます。疲れた頭を癒す為の休憩室のお茶のおいしかったこと。タバコの煙を通して四季の移り変りを眺めつつ思索の一時を過したのも、西南の図書館の思い出です。

大学をアカデミックな面と人間形成の面に於ける真理探求の場であるとすると、図書館は本当に重要な存在であるということが出来ると思います。学園という温床の中で純粋に真理探求にふけるのも、人生に於ける4年間の短い学生々活だけで、やがてサラリーマンとして社会の雑踏の中で生きねばならない自分にとって、純粋に1つのことに対して思索にふけりえたことは楽しい思い出であり、又これからのサラリーマン生活に主体性と純一性を与えてくれるものと思います。それから図書館の悪い思い出として、閲覧室において私話が非常に多いことです。大学生として勉強の場を自覚しない学生には本当に立腹せざるを得ません。この点について、学生に対する啓蒙をお願いする次第です。

第2はチャペルの思い出ですが、私が西南大に入学してから、最初の朝のチャペルは何か異常なものを感じました。普通の大学では一番貴重な時間に清らかな讃美歌を歌うことは何か別世界に来た感じでした。神について特別に無関心であったわけではありませんが、静かな讃美歌の音は自分を清め、始めてミッション・スクールというものを本当に認識致しました。現在こうして主を知り、クリスチャンとして学窓を後にしようとしている時、自分にとって入学時の清らかな讃美歌は求道への招待であったといえるのではないかと思います。僅かな2年間でしたが、この西南がキリストを中心としてあり、学問もこれを中心として基礎づけられていることを知り、始めて西南の「よさ」を知ることが出来ました。

第3は、先生方との議論です。西南は他の私立大学に比べ学生数も少なく、ゼミナールも必修だし、少なくとも1人の先生からは個人指導を受けるわけで、いろんな疑問を持っていけば必ず話し相手になって下さるという事です。

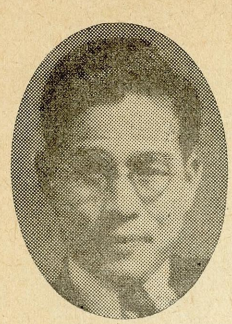
私はある先生から事物に対する科学的姿勢、即ち何故にこのようになるか、一体これをどのようにしたらよいかという、科学的態度・意識というものを学生生活では身につけなければいけないといわれましたが、考えてみると本当に立派な忠告であると、かえりみて感謝致しております。

やがて西南を出たとしても、なつかしい学生時代、図書館での思い出、チャペルを通してキリスト教の思い出、そして諸先生方との思い出、全てが過去のものであるとしても、私の胸の中には楽しい思い出として生きて行くものと思っております。自分を育ててくれた西南を自信をもって人に語る事が出来ると思います。最後に西南の将来に栄光あらん事を祈りつつ筆を置きます。(1963.3.20)

(筆者は昭和38年3月商学部卒業、現在菱電サービスKK勤務)

現図書館の完成とその意義

中村　弘



私が第4期及び第5期館長として在任した昭和27年1月10日より同30年12月の4年間は、西南学院図書館としては種々の意味で、多くの変化があった時期だといえる。新制大学としての必要条件として図書館の設備の拡充と完備は、私共の大学の大きな課題であった。旧制の専門学校時代より受けついだ、あの赤レンガ3階建の図書館より脱皮するのに多くの知と熱情がそそがれて、現在のものになるには幾つかの段階があったように思う。今その概要を想起して、新しい図書館建設への参考にしたい。

1、現図書館建設＝皆が静かな読書の場としてのぞんだ図書館は、旧いもののままではあまりにも貧弱であり大学の設置の規準にそわぬものであったので、前図書館長の時期よりその計画が実現の方に向って進んでいた。しかし、一挙にこれを解決することが困難であったので、大学は旧館と同時に大学新館の中に、いわゆるリザーブド・ルーム（講義受講のために読むべき必要な図書を保管した）を開設した（27年8月）。その場所は現本館の2階205・206の室であり、ここに藤崎九州男（惜しくも38年夏の水害のため他界された）、藤井信子(他界)、河野盟子、小林敦子、西福江の諸氏にその管理をお願いした。まことに静かな雰囲気で熱心な学生の学びの場となっていた。

ついで29年10月に現図書館がアメリカ・ミッション・ボードの寄附により約4千万円の費用を以て建てられた。この建築については後述の図書館運営の基本方針によって、ボーリス建築事務所の関係者が、アメリカの図書館を実地調査されて設計され、辻組の施工によって、見事なものが出来上った(建坪192坪、延坪592坪、座席数210、蔵書能力10万冊)。

開架式の図書館としては、西日本最初のものであり（厳密な意味では洋書を閉架にしているので完全な開架式ではない、不完全開架式ともいうべきか）、またそれぞれの図書分類によるデパートメント・システムを採用したため、各地よりの見学者が当時多くあったように記憶する。内部の配色・机の色彩は、中性色を主調として、心的な安定感を出すため、とくに意を配った苦心もある。当時の図書館関係者、杉本善夫、荒川文雄、坂口ノブ、渡辺道子（他界）、田口欽二、岩本拓及び新採用の山下和夫の諸氏と、どんなに喜んでこの新館に入ったかは、相共に忘れることの出来ぬものである。新館建築に伴って旧館は中・高用のものとなり、また、リザーブド・ルームは次第に閉館にした。

2、図書館委員会の活動＝新制大学の図書の購入、読書指導について、また管理・運営については多くの多面的検討が必要であり、当時としては、有力な6名のスタッフに依頼して、種々な活動がなされた。現在図書館の基礎は、この委員会の活動に負う所大である。その一例として学院事務職員の公募、選考を客観的にし始めたのは、後によい影響を及ぼしたと考える。

3、オープン・システムの採用＝旧い閉架式の図書館の形式では自由な学問のための図書検索に不便であるので、教授会で多くの時間をかけて、現在の開架式が採用された。（図書館はセミ・オープン式を主張したが、うけ入れられるところとならなかった。）この構想の背後には、学生への絶大の信頼があることを忘れてはなるまい。

4、新しい図書館員の増加＝学生の感じを、なごやかにする意味、手不足等の種々な要求によって、図書館に女性アルバイト員として鴻江イノ(現長野姓)、庄野美和子（現伊藤姓)、山藤ハルヨ（現城戸姓)、白石初子、岡崎晃、藤崎昌男の諸氏を迎え、また本格的充実をはかる意味で山下和夫、伊藤治生の諸氏を受け容れた。ここに新館の力が大きく拡充する結果が現出したわけである。

5、図書館員の教育＝新しい大学の図書館員には多くのことが要求される。この頃より全国図書館員の資格が、やかましく考えられ、講習会、研究会、協議会が開催され、司書・司書補の資格づけがされるようになって来た。私共の大学でもこの点を痛感し、多くの館員がその資格を得られたことは、喜ぶべきことである。

6、図書整理方式改革の継続＝前図書館長により企図された図書整理方法の新様式（N.D.C式）への切りかえは続行され、杉本氏を中心として、在任中その全図書の8割は終了したように記憶する。この点はあまり目立たぬことであるが、図書館利用上大きな進歩であった。

7、新館への出発＝当初蔵書数約10万冊の予定で建築された現図書館も約10年の星霜の下に、場所的に狭いものとなりつつある。学問の援助の場としてその不備も指摘されるようになって来た。思えば西南学院大学も大きく伸びて来たものだという感が深い。開館直後に来館された神学者ブルンナー教授が、小さいがよく出来た図書館といわれたあの言葉も今はその狭さのために、その脱皮の時期に来たようである。聞くところによれば計画化されつつあるとのこと、誠に双手をあげて喜ぶべきことであろう。だが私共の大学として忘れてならぬ基本的方針は、常に堅持されねばならぬ。キリストに忠実なるものとして、神を恐れることが知の始まりであることは忘れられぬことであろう。

図書館がこのような知ること、考えることの基本的立場を教え、訓練することを中心としなければ、単なる山積された貯蔵庫にすぎぬことになる。私は在任中、前述の多端であったその仕事を通して、いつもこの知ることの基本的な態度のことを念頭において来た。知即居敬の精神がなければ図書館は生きぬことを考えたい。

（文学部教授）

—学院図書館回顧録その6—

視聴覚教育設備の設置と利用について

大学教育における補助手段として、視聴覚資料の整備と機材の購入の必要が、かねてから指摘され、強調されてきたのであるが、このほど、大学図書館にそのための機材一式が備え付けられることとなったのは大変喜ばしい。これまで何かといえば、高校や中学の機材を借用などしてすましてきたが、もはやそれではすませない段階に達していたからである。

備え付けられた機材は次のものである。

① 16ミリトーキー映写機　エルモAR—16付属品一式（磁気録音、光学・磁気再生つき）
② 8ミリトーキー映写機　エルモTP—8　付属品一式（磁気録音、再生つき）
③ 8ミリ撮影機　ベル・ハウエル・ズーム　付属品一式
④ スライド・プロジェクター　マスターオートルックス
⑤ カメラ　キャノネット
⑥ 8ミリフィルム製作用機器
　ビュアー・エディター、タイトラー、スプライサー、ストロボ、露出計、照明器具
⑦ ディライト・スクリーン
⑧ テープコーダー　ソニーTC—272　付属品一式

以上のものは、当初の計画から予算などの都合で16ミリ撮影機などが後廻しとなり、急を要するものだけにしぼったもので大学教育用としてもうこれで充分だというものではないが、今後次第に充実してゆくこととなろう。

この機材は、本学の専任教職員と学生諸団体（学文会や体育会など）その他図書館長の許可を得た者が利用することができる。もちろん、機材には取扱い上の知識が必要であり、そこでさる10月10日（土）の午後に第二会議室で希望者を集めて、「視聴覚機材取扱説明会」が実施され、教職員や学生団体代表者など多数の参加を得て、熱心な実習が行なわれた。この「取扱説明会」は、今後も時々実施する予定であるが、機材の種類によっては、「取扱説明会」の出席者でないと貸出をお断わりすることがあるから、利用希望者は是非参加されるようお願いする。

以下に、利用規則の一部を掲げる。

視聴覚教育設備利用規則（抄）

第2条　この設備は、本学の視聴覚教育の目的に利用するものとする。

第3条　本学の専任教職員、学生団体その他館長の適当と認めた者は、所定の手続きに従い、館長の許可を得て、この設備を利用することができる。（学生団体はその部長ないし会長の承認を経て願い出る。）

第5条　この設備の貸出期間は、貸出日を含めて8日以内とする。特に必要があるときは、館長は貸出期間を延長することができる。

第6条　操作の困難な設備の利用については、館長は貸出を制限し、またはその操作を本館の職員に当らせることがある。

第7条　貸出を受けた設備に事故を生じたときは、直ちに館長にその旨を届けでなければならない。

第8条　①　この設備の貸出を受けた者は、善良な管理者の注意をもって、利用しなければならない。
②　利用者の著しい不注意による損害は、これを賠償させることがある。

冬休みの読書

志村治美

やがて木枯しの吹きすさぶ冬が訪れる。だがそこには、学生諸君にとって冬休みというまとまった自由な時間がある。あわただしい毎日の予習復習の拘束から解放されて、一人静かに机に向かい自己に沈潜しうるのも冬休みの楽しみの一つであろう。

しかし、このまとまった自由な時間を、有意義な読書に費やすためには、如何なる方法が有効かは考えておく必要があろう。古くからいわれて来たことではあるが、個人全集によって、過去の偉大な学者達の思索の足跡をたどるのも悪くはあるまい。また一定の時代に限定し、その時代の特質をあらゆる視角からアプローチするのも一つの方法であろう。

たとえば次の三冊を手はじめに読むのもいいだろう。1800年代のロシヤ史上の事件を背景に、貴族社会の複雑多面な生活相をあますところなく描写した、トルストイ「戦争と平和」、ドイツ革命前夜における一般社会情勢を分析し、自由主義的ブルジョアジーの役割を批判したマルクス・エンゲルス「革命と反革命」、19世紀の三大精神潮流たるドイツ古典哲学、イギリス経済学、フランス社会主義からマルクス主義に至る社会科学思想の系譜を示すエンゲルス「空想より科学へ」は、いずれも19世紀中葉の「人」、「社会」、「思想」を諸君の前にくっきりと浮び上らせてくれるであろう。

他方、先の学園祭では「現代の不安」という統一テーマが選ばれ、各種の催しがなされた。学園祭を単なるお祭りとして終らしめずに、自己のものとして再び確かめるために、次の様な本を読むことも考えられる。

パッペンハイム「近代人の疎外」
カミュ「異邦人」
アーサー・ミラー「セールスマンの死」

われわれの疎外が、人間の条件に根ざすものか、特定の社会の歴史的構造に由来するものか、について、諸君の思索に何らかの手懸りを与えてくれることと思う。

寒い冬もやがては春を迎える。この冬休みの諸君の思索が、来たるべき春の土壌となって、明るい花を咲かせるであろうことを期待している。

（商学部講師）

奉仕係より

○ 昭和37年度館外貸出図書冊数（学生）

分類別	昭和36年度	昭和37年度
0 総記	170	133
1 哲学	1,882	2,045
2 歴史	294	409
3 社会科学	6,163	5,803
4 自然科学	481	409
5 工学	119	121
6 産業	1,419	1,552
7 芸術	630	626
8 語学	452	424
9 文学	4,621	5,261
雑誌	516	514
計	16,747	17,297

昭和37年度一年間の学生の貸出冊数を前年度と比較して見ました。全体で約 500冊増加しており、一般に、人文科学系統の増加が目立っています。
月別では、何といっても、11月・12月の両月が相変らずトップを占め、2,000冊以上をマークして、読書シーズンに相応しい数字を示しています。

整理係より

★ ★ ★

※ 昭和37年度増加図書冊数

種別	和	洋	計
購入	2,516	761	3,277
寄贈	751	330	1,081
その他	656	136	792
計	3,923	1,227	5,150

昭和37年度は1年間で5,150冊の図書が整理され、その内訳は左表のとおりです。
このほか、雑誌 279種、新聞31種、視聴覚資料69点、卒業論文 321冊などが受け入れられました。
昭和38年3月31日現在の蔵書数は、（和）53,115（洋）19,253（計）72,368冊です。（ただし、本館のみ）

※ 新購入雑誌リスト（昭和38年度）

（国内）

歴史評論	（月）	春秋社
国土産業経済	（月）	国土産業経済研究所
国民経済計算	（季）	大蔵省印刷局
数理科学	（月）	ダイヤモンド社
地質ニュース	（月）	実業公報社
新聞広告縮刷版	（月）	世界文庫
俳句	（月）	角川書店

（フランス）

Esprit	(M)	Esprit, Paris
Le Monde	(W)	Le Monde, Paris

（ドイツ）

Der Spiegel	(W)	Der Spiegel, Berlin
Die Welt	(D)	Die Welt, Berlin

○ 昭和37年度入館者数（学生）

学科別	昭36年度	昭37年度
神学科	30	23
英文学科	16,438	18,969
商学部	47,110	52,681
短大(児教)	196	216
その他	192	34
計	63,966	71,923

一年間の入館者数（学生）を前年度と比較すると、左表のように約8千名の急激な増加が見られます。
最近の学生数の増加が最も大きな原因と思われます。
ことに前期試験のあった9月は25日間で12,905名と、1日平均516名にも及び、館内は連日満員御礼の垂幕を下げたい程の盛況でした。

○ 相変らず館内の雑談が多いのは、全く困ります。館内での静粛のエチケットを心掛けて下さい。

○ 閲覧済みの図書は、机の上に放置せず、出入口の付近にある所定の棚に返却して下さい。

告知板

○ **卒論特別貸出実施中** 4年次の学生は、卒業論文作成のための特別貸出ができます。冊数は3冊以内、期間は1か月間です。所定の用紙にゼミの指導教授の証明をもらって係まで申し込んで下さい。

○ **卒業論文の製本について** 卒業論文は製本の上、図書館に保管されることになります。そこで卒業論文を提出されるときは、製本代金を経理課に納入し、その領収書をそえて教務課に提出して下さい。製本代金は、商学部学生は一人 150円、英文学科学生は一人50円です。

○ **東京・大阪の電話番号簿の備え付け** 図書館に東京都内23区の電話番号簿と大阪市内（尼崎・布施・吹田・守口の各市を含む。）の電話番号簿を備え付けました。いずれも50音別の分だけです。事務室にありますので、利用希望者はお申し出下さい。

○ **卒業記念文庫の新設** 卒業に際して、後輩のために役立たせようと図書館に寄贈された図書がかなりあります。今回、この先輩の好意を充分生かす意味で、「卒業記念文庫」を新設することにしました。場所は1階辞書室の入口です。どしどし利用して頂くとともに、卒業期には1冊でも多くの図書を後輩のために寄贈して下さるようお願いします。

○ **年末年始の休館と冬休みの長期貸出**

年末年始の休館などの予定は次のとおりです。

12月28日（土）～ 1月4日（土） 休館
12月25日（水） クリスマス（休館）
12月26日（木） 午後5時まで
12月27日（金） 正午まで
1月6日（月）、7日（火）午後5時まで

冬休みの長期貸出を行ないます。冊数は2冊以内、期間は、12月18日（水）から1月14日（火）まで。